

上司小剣『東京』の出版に関する補遺

——信州大学所蔵石井鶴三関連資料から——

荒井真理亜（相愛大学人文学部）

一

上司小剣のライフワークであった「東京」四部作は、第一部から三部まで完結し、第四部は連載中に上司小剣が死去したため未完である。

本として出版されたのは、『東京第一部愛欲篇』『東京第二部労働篇』『長篇小説全集第十六巻 上司小剣篇』の三冊である。

「東京」の出版に関しては、これまでも、日本近代文学館の「上司小剣コレクション」にある上司小剣宛石井鶴三書簡を手がかりに「上司小剣『東京』（四部作）の成立過程」^①をまとめた。また、信州大学所蔵石井鶴三関連資料を調査し、「上司小剣『東京第一部愛欲篇』の制作状況」^②および「上司小剣『東京第二部労働篇』の出版とその後」^③を発表した。

その後、二〇一八年の調査で、信州大学所蔵石井鶴三関連資料から「東京」の出版と第四部〈建設篇〉の創作に関する石井鶴三宛上司小剣書簡十通が新たに発見された。特に『長篇小説全集第十六巻 上司小剣篇』に関する書簡は、これまでの調査では確認されていなかったものである。日本近代文学館の「上司小剣コレクション」には上司小剣宛石井鶴三書簡が九通所蔵されており、その中に『長篇小説全集第十六巻 上司小剣篇』に関するものが二通ある^④。これに

対応するであろう石井鶴三宛上司小剣書簡が、二〇一八年の調査で発見されたのである。

二

上司小剣の「東京」第一部〈愛欲篇〉は、大正十年二月二十日から七月九日まで「東京朝日新聞」に計一四〇回連載された。同年十二月二十五日、大鑑閣より『東京第一部愛欲篇』が刊行された。

『東京第一部愛欲篇』の挿絵と装幀を担当したのは、新聞連載時に挿絵を描いた石井鶴三である^⑤。

『東京第一部愛欲篇』がどのような過程を経て刊行されたのかについては、先に挙げた拙稿「上司小剣『東京第一部愛欲篇』の制作状況」で明らかにした。

まず、上司小剣は大正十年七月八日、すなわち「東京」第一部〈愛欲篇〉の新聞連載が終わらないうちに、石井鶴三に「東京」四部作の装幀を依頼する手紙を書いている。しかし、その時点ではまだ出版社が決まっていなかった。「東京」の出版には、上司小剣が以前『花道』を刊行した玄文社^⑥も名乗りを上げていたが、八月六日には大鑑閣に決まった。

『東京第一部愛欲篇』を大鑑閣から出版することになった経緯

を、上司小剣は「未完成『東京』の記」の中で、「そのころ盛んにやつてゐた大鐘閣の面家莊侘氏から早速出版の交渉があつた」、「私の本は売れないから」と躊躇すると、面家は「いやきツと売つてみせる」と言つて自分を説得したと回想している。⁷⁾

『東京第一部愛欲篇』は、九月十三日に「初めの方」が校了となり、上司小剣は石井鶴三に口絵および「日比谷の絵」と「浜町の絵」を催促した。十月十四日には校正は「半分ほど」済んでいた。さらに、「三分の二」まで校正を終えた上司小剣が、再び石井鶴三に「表紙と画とを」催促したのが、①の書簡である。

①石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号〔馬場59—159〕）

石井様

上司生

拝呈。京都へ御旅行の由、お帰りの上は

御面倒恐れ入りますが、何卒例の『東

京』の表紙と画とを「二字不明 ミセケチ」至急にお

願ひいたしたいと存じます。画は最初

九枚の筈でしたが、若し今からでは印刷

が間に合はないといふやうなことがあります

たら、もう少し減じてもらふかと考へますの 「改ページ」

で、本屋へ都合を問ひ合はしておきま

した。返事があり次第申し上げますが、

何んとも申し上げませんでしたら、矢張

り九枚のおつもりに願ひたいと存じま

す。校正も漸く三分の二まで片付

けました。兎に角いろ／＼御厄介をかけ

まして恐れ入ります。奥様によるしく申し上げて下さいまし。

*一枚目便箋上部に左のように書かれている。

奥様に申し上げます。先日はお葉書ありがたう存じました。

封筒表の宛先は「府下。板橋町字中丸二六六／石井鶴三様」である。消印の日付は大正十年十月二十一日、時間は判読できず、地名は「白金」である。封筒裏の差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣」（朱印）で、上司小剣が日付を「十月二十一日」と記している。便箋は「東京社特製」の「上司用箋」二枚で、本文は封筒と同様にペンで書かれている。

これより以前に、上司小剣は石井鶴三に手紙を出していたようだ。①の書簡に「京都へ御旅行の由」とある。石井鶴三は再興第八回日本美術院展覧会京都展（大正十年十月十四日～十一月六日）のために京都に行っていた。石井鶴三は不在で、上司小剣の手紙を受け取れなかった。そのことを鶴三の妻が葉書で知らせたのである。上司小剣は「奥様に申し上げます。先日はお葉書ありがたう存じました」と追記している。

①の書簡の目的は、「何卒例の『東京』の表紙と画とを至急にお願ひいたしたいと存じます」ということである。ただ、石井鶴三が旅行中であつたことも考慮してだろう、「画は最初九枚の筈」だったが、「今からでは印刷が間に合はない」ようなら「もう少し減じてもらふか」と考え、「本屋へ都合を問ひ合はしておきました」と

報告している。

小説の校正は十月三十日には終わっていた。それまでも上司小剣は石井鶴三と大鏡閣を仲介し、石井鶴三に本の寸法を確認したり、挿絵のタイトルや函の意匠を依頼したりしていた。石井鶴三の装幀と挿絵は十一月二十日にすべて揃ったようである。挿絵は当初の予定通り九点あった。

十二月十五日に上司小剣が『東京』の装幀挿画とも非常に結構でございましたね」と石井鶴三に礼状を書いている。その十二日前、すなわち十二月三日に上司小剣は石井鶴三に宛てた葉書で、「校正はご覧に入れたでせう」と問い合わせていた。しかし、出版社が石井鶴三に校正を見せていなかったことが、刊行後に発覚する。その件について、上司小剣が石井鶴三に詫びたのが、②の書簡である。

②石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「馬場59—160」）

拝呈。昨夜大鏡閣の生駒氏来られ、画の校正を御覧に入れなかつたことを大層あやまつて居りました。全く新年の売り出し期日に切迫し一刻を争ふ場合となつたためだ「一字不明 ミセケチ」さうで、私からもよろしくお詫申してくれと申して居りました。

表紙及画の字は活字にするよりもあな
たの原稿の御字の方が非常に結構だ
と私も思ひます。本屋でもさう思つて
態とあのまゝにしたのだと申して居

「改ページ」

りました。大鏡閣有数の好装幀

になつて一回悦で居り、これ皆石井

さんのお蔭だと申して居ります。春

になれば引きつき第二部にかゝる

さうですから、御多忙中、御厄介でせう 「改ページ」

が何分よろしくお願ひいたします。歳

末多忙の際乱筆おゆるしを請ふ。

十二月二十八日

上司小剣

石井鶴三

装幀及「一字不明 ミセケチ」画のお札にまだ参上い

たさぬよし、早速参上するやう申して

おきました。小生が参上する筈ですが、来春を期します。

封筒表の宛先は「府下。板橋町字中丸二八二／石井鶴三様」である。消印は大正十年十二月二十八日、午後一時から二時、地名は「白金」である。封筒裏の差出人は「東京、下目黒四二二／上司小剣」（朱印）で、上司小剣が日付を「十二月二十八日」と記している。便箋は「東京社特製」の「上司用箋」三枚で、本文は封筒と同様にペン書きである。

「大鏡閣の生駒氏」は「生駒鐵男」といい、上司小剣の『東京第一部愛欲篇』の担当者だと思われる。上司小剣は出版社が謝っていたことを石井鶴三に伝え、出版社には石井鶴三に礼を言いに行くよう指示している。ここでも上司小剣が仲介役を務めている。

②の書簡には、「表紙及画の字は活字にするよりもあな

の御字の方が非常に結構だと私も思ひます。本屋でもさう思つて態とあのまゝにしたのだと申して居りました」とあり、『東京第一部愛欲篇』の表紙と挿絵の字は石井鶴三が書いたことがわかる。

「大鏡閣有数の好幀装」で刊行された『東京第一部愛欲篇』はよく売れた。その発行部数について、上司小剣は先の「未完『東京』の記」で、次のように述べている。

面家氏も「きつと売つてみせる」とは言つたもののさう自信もなかつたのか、店員の生駒鐵男氏に最初に持たしてよこした印紙は僅か二千部だつた。ところが三月後に一躍追加五千部の印紙に捺印させられた。それからまた二千部、三千部、二千部といふ具合ひに、なんでも一万三四千部に達した。私としては他にこれほど売れた本はなく、それに定価が三円以上だつたので、後年の円本を除くと、印税の収入も、私としては巨額であつた。一年後に面家氏から回はされた計算書によると、返品は僅か二部、2といふ赤い字が、私の眼にいまも嬉しく残つてゐて、他は皆黒字なのを、私は今も大事に保存してゐる。⁸⁾

②の書簡で、上司小剣は「春になれば引きつゞき第二部にかゝるさうですから、御多忙中、御厄介でせうが何分よろしくお願ひいたします」と述べていた。

『東京第二部労働篇』の制作過程については、先に挙げた「上司小剣『東京』（四部作）の成立過程」および「上司小剣『東京第二部労働篇』の出版とその後」で明らかにした。

それによると、実際に「本屋の方から頻りに急ぎ立て」られた上司小剣は、二月八日付の葉書で石井鶴三に装幀を依頼し、『東京第

二部労働篇』の出版に向けて動き出したようだ。石井鶴三は十五日に承諾の葉書を出しているが、「さし絵は少しむづかしいやう存しますが」「中の挿絵は無しに致しませうか」と打診している。「東京」第二部〈労働篇〉は雑誌「中央公論」「解放」に連載されて挿絵がなかつたからである。上司小剣は十六日に返信し、巻頭に主人公の肖像画だけを入れることを提案した。しかし、四月十九日の葉書には、版元である大鏡閣が挿絵を入れたいと希望しているので、会つて相談したいとある。この相談の結果、『東京第二部労働篇』にも挿絵を入れることになつたのであろう、六月二十七日に上司小剣は石井鶴三に挿絵を催促する葉書を出している。できた絵から大鏡閣に回してほしいとあつた。そして、その葉書と同日に書かれたのが、③の書簡である。

③石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号〔馬場59-163〕）

石井様 上司生

お手紙拝見。お忙しいところを何んと

も恐れ入りますが、「不明四字 ミセケチ」何分よろしく

願ひます。もう原稿も校正も余程

進みましたから、どうぞよろしく。印刷を

急ぐがために、製版がぞんざいになつたり

するといけませんから、何卒よろしく。

お願ひいたします。

六月二十七日

封筒表の宛先は「府下。板橋町中丸／石井鶴三様」である。消印

は大正十一年六月二十七日、時間は午後零時から一時、地名は「白金」である。封筒裏の差出人は「東京府下目黒四二二／上司小剣（印刷）」で、上司小剣が日付を「大正〇年六月二十七日」と記している。便箋は二百字詰原稿用紙一枚で、本文は封筒と同様にペンで書かれている。

「お手紙拝見」とあるので、石井鶴三の手紙への返信である。「原稿も校正も余程進みました」と進捗状況を知らせるとともに、印刷を急いでいることを伝え、やはり挿絵を催促している。

石井鶴三は七月十六日に「先日三枚渡して」「次の三枚を二三日中に渡したい」と、挿絵の進捗状況を知らせる葉書を上司小剣に送っている。さらに八月一日の葉書では、「先月二十四日全部渡しづみになりました」と報告している。『東京第二部労働篇』には、主人公の肖像画をはじめ、石井鶴三による挿絵が六点ある。

『東京第二部労働篇』は、大正十一年八月二十五日に大鑑閣より刊行された。その発行部数について、上司小剣は前掲の「未完成『東京』の記」で、『第二部労働篇』は直ちに大鑑閣から出版し、これは七千部ほどだった¹⁰⁾と語っている。

さらに「つづいて『第三部争闘篇』の起稿を催促されてあるうちに大震災となつた」と述べている。しかし、「東京」第三部〈争闘篇〉は、その初めが大震災前にすでに雑誌「解放」に発表されていた¹¹⁾。

大正十二年九月一日に関東大震災が起こり、「解放」を発行していた解放社は大鑑閣とともに罹災、「解放」の発行は停止する。上司小剣の自筆年譜によると、大正十二年「九月の震災に遭ひ、出版元大鑑閣焼亡し、校正中の原稿を焼く」とある。

解放社が雑誌を発行できなくなったため、「東京」第三部〈争闘

篇〉の続きは、「東京朝日新聞」に大正十二年十月一日から十二月二十九日まで計九十回連載された。挿絵は石井鶴三が担当している。一方、「東京」四部作の刊行を契約していた大鑑閣が震災で倒産してしまつたことで、第三部〈争闘篇〉の出版は「直ちに」とはいかなくなつた。その様子が窺えるのが、④の書簡である。

④石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「馬場59-170」）

拝呈。『東京』も、其の後いろいろ忙しくて、続稿がまとめられませんので、画のお願いにも行かずに居ります。いづれよろしく願ひ申します。

『日々』の大菩薩峠の絵を、感心して拝見して居ります。

奥さまによろしく。

二月二十七日

葉書表の宛先は「市外板橋中丸二六六／石井鶴三様」である。消印は判読できない。差出人は「東京、下目黒四二二／上司小剣（印刷）」である。葉書は一般的な「通信省発行 印刷局製造」の郵便はがきを用いており、表も裏もペンで書かれている。

消印は判読できないが、本文に『日々』の大菩薩峠の絵を、感心して拝見して居ります」とあるので、「東京朝日新聞」に連載された中里介山の「大菩薩峠」に石井鶴三が挿絵を描いていた時のものである。葉書は「二月二十七日」に書かれている。その頃「大菩薩峠」が「東京朝日新聞」に掲載されていたというので、この葉書が書かれた年は〈無明の巻〉が掲載された大正十四年か、〈流転の巻〉

が掲載された大正十五年に絞られる。⁽¹³⁾さらに、大正十四年五月三十日に、上司小剣は石井鶴三に『東京』に就いていまのうちに御相談に出たいと存じます」「不景気のドン底に出すのは損だと思つて居りますが、準備だけは整へておきたいと思ひまして」という手紙を出している。上司小剣は大正十四年五月には「東京」第三部へ争闘篇の刊行の準備を始めようとしていたのである。よつて、④の書簡は大正十四年二月二十七日に書かれたものだと推定できる。

三

「東京」第三部〈建設篇〉の刊行が決まった、というよりも第一部から第三部までを一冊にまとめて出版することになったのは、昭和二年の歳末か、三年の正月頃である。そのことを上司小剣が石井鶴三に急ぎ知らせたのが、⑤の書簡である。

⑤ 石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「馬場59—164」）

拝呈。暫らく御無沙汰いたしました。

扱例の『東京』もあとが書けない

ので出版がのびくになつて居りま

したところ、今度新潮社から今

までのものを三部纏めて、とりあへ

ず、長篇小説全集の中の一

巻として出すことにいたしました

た。就いては挿絵を三十枚ほど

入れたいのことに、朝日へ出まし

た分のうちお手元に御保存の

がまだございましたら、適当

なものを二十九枚だけお撰ひ

下さいまして、一枚は「争闘篇」

のはじめへ明治神宮祭の「改ページ」

光景を一枚だけ新たらしく

お描き願へますれば、甚だ

仕合せに存じます。いづれお

目にかゝりましてお願ひいた

しますし、新潮社の方から

も数日中にお伺ひいたすこ

と、存じますが、取り敢へず

御内諾だけを願ておきたい

と存じます。何分の御返事

願へますれば、幸甚。お忙し

いところを御無理願ひまして恐れ入り候。

一月八日

上司小剣

石井鶴三様

侍史

封筒表の宛先は「池袋中丸二六六／石井鶴三様」である。左に「至

急」とある。消印はない。封筒裏の差出人は「東京、下目黒四二二

／上司小剣」（印）で、上司小剣が日付を「一月八日」と記してい

る。便箋は「東京文房堂製」の四百字詰原稿用紙二枚で、本文は封

筒と同様にペンで書かれている。

消印がないので、封筒だけでは年が特定できないが、本文に「今度新潮社から今までのものを三部纏めて、とりあへず、長篇小説全集の中の一巻として出すことにいたしました」とあるので、昭和三年一月八日の書簡であろう。

「東京」第一部から第三部までを『長篇小説全集』の一巻として刊行するにあたり、上司小剣は石井鶴三に「挿絵を三十枚ほど入れたい」という出版社の意向を伝えた。そして、二十九枚はこれまでの挿絵から選ぶことを提案し、「争闘篇」のはじめへ明治神宮祭の光景を一枚だけ新たらしく描いてほしいと頼んでいる。

石井鶴三はこの依頼を承諾し、上司小剣は⑥の礼状を書いている。

⑥石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「馬場59—165」）

石井様 侍史 上司生

拝呈。

早速御承諾を得ましてうれしく

存じます。私としては、むろん新らしくお描き下さった方が有りがたいのですけれど、お忙しいこと、思つて遠慮しましたのと、前にお描き下さったのに、新聞挿絵としては空前の名画がありましたので、そのうちからお撰び下さるやうにお願ひしたわけ

でございます。時日にどれほどのゆと

りがあるか、それは新潮社の方へきか

なければわかりませんが、古「の ミセケチ」「い 左傍挿入」方の画（新聞に出ました）のうちでも、私

方にございます日比谷公園の画や、多分朝日社に保存してあると思は

れます裸婦（小夜子入浴、争闘

篇）の絵は是非入れたいと思ひま

す。明治神宮祭の画も楽しみにし

て居ります。いづれお目にかゝつて申し上

げますが、取り敢へず御礼まで。草々。

一月九日

いづれ新潮社の渡辺氏が

そのうち参上されるでせう。

封筒表の宛先は「市外。板橋町中丸二六六／石井鶴三様」である。

消印は昭和三年一月九日、時間は午後四時から六時、地名は欠損。

封筒裏の差出人は「東京、下目黒四一二／上司小剣」（印）で、上

司小剣が日付を「一月九日」と記している。便箋は「東京文房堂製」

四百字詰原稿用紙一枚で、本文は封筒と同様にペンで書かれている。

上司小剣が「私としては、むろん新らしくお描き下さった方が有りがたいのですけれど」と言っているのです。石井鶴三はこれまでの挿絵を選ぶのではなく、新たに絵を描くつもりだったのではないか。

上司小剣としては、その判断を石井鶴三に委ね、「裸婦（小夜子入浴、争闘篇）」の絵」と「明治神宮祭の画」は入れたいと考えていた。

その後、石井鶴三と上司小剣、また「新潮社の渡辺氏」との間でど

のようなりとりがあつたかはわからないが、上司小剣は八月十二日に「例の『東京』の挿絵に就き一度参上御相談申上げたい」として、石井鶴三に⑦の書簡を送っている。

⑦石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「馬場59-167」）

拝啓 暫らく御無沙

汰申上げました。偕

例の『東京』の挿絵

に就き一度参上御

相談申上げたいので

すが突然参りました

でも御不在だと失望

しますから向ふ一兩

日（兩三日中でも）に御

都合の時と日とを

此使にお知らせ下

さらば結構に存じ

ます。御多忙中

誠に御迷惑とは

重々お察して居

りますが新潮社では

予定の狂ふのを大

層心配して居ります

ので何分ともによ

ろしく願上げます

私も芸術的良心か

らこの暑いのに百

枚ばかり書き加へる

ことになりまして

どこか涼しいところへ

でも出かけやうかと思つ

てゐるところでござ

います。画が一部

に偏するといけない

と思ひますので新

場面のところをも

一二枚お願ひしたい

と考へて居ります委

しくは拝眉の節

申し上げます。では

いつ参上いたしま

したら一時間ばかり

お話しが出来ませうか

御返事をお待ち

いたします。

草々

八月二十二日

上司生

石井鶴三様

侍史

封筒表の宛先は「池袋。——板橋町中丸二六六／石井鶴三様」である。持参便のため、消印はない。封筒裏の差出人は「東京、下目黒四二二／上司小剣」(印)で、上司小剣が日付を「八月二十二日」と記している。巻紙で、本文は封筒と同様に墨書である。

消印がないので、封筒からは何年の書簡かを判断できないが、本文に「新潮社では予定の狂ふのを大層心配して居ります」とあるので、『長篇小説全集 第十六卷 上司小剣篇』の制作が進んでいた昭和三年八月二十二日に書かれたものである。

「東京」第三部〈争闘篇〉は、「東京朝日新聞」での連載の最終回、すなわち大正十二年十二月二十九日の本文末尾に「(この章完結)」と記されていた。上司小剣はその続きを「芸術的良心から」「百枚ばかり書き加へる」ことにしたのである。そのため、「画が一部部に偏することがないように、石井鶴三に「新場面のところをも一二枚」挿絵を描いてもらう必要があった。先の「御相談」はこの「新場面」についてだったのではないか。

しかし、「新場面」を「百枚ばかり書き加へる」のは容易ではなかったようだ。上司小剣は⑧の書簡で、挿絵の礼とあわせて、その進捗状況を知らせている。

⑧石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号〔馬場59—168〕)

拝呈 おかき下すつた

画を二三枚、校正刷

に「刷 ミセケチ」「貼 左傍挿入」つて来たのを拝

見しましたが、いづれ

も結構で感心いた

しました 厚くお

礼を申し上げます

日比谷の絵はまだ

拝見しませんか、す

ばらしいものだど社

の人が言つてゐまし

た

口絵の油画は

そのうちおひまの節

私も記念に一つ「同じのを 左傍挿入」かい

ていたゞきたいと存

じます 漸く争闘

篇まで書き上げた

好記念であらうと

思ひます

私の書き足しの

原稿がまだ出来

ないので、新潮社から

劇的な催促を受

けてゐます

まづは御礼まで、

忙しいのでまだ院

展も拝見しませ

ん

九月二十三日

上司生

石井様

封筒表の宛先は「市外板橋町中丸二六六／石井鶴三様」である。左に「御礼状」とある。消印は昭和三年九月二十三日、時間は午後だがそれ以外は判読できない、地名は「白金」である。封筒裏の差出人は「東京、下目黒四二二／上司小剣」(印)で、上司小剣が日付を「九月二十三日」と記している。巻紙で、本文は封筒と同様に墨書である。

「おかき下すつた画を二三枚、校正刷に貼つて来たのを拝見しました」というので、九月二十三日には部分的に校正刷りが出ており、それには石井鶴三の挿絵も入っていたのであろう。また、「日比谷の絵はまだ拝見しません、すばらしいものだ」と社の人が言つてゐました」とあり、「口絵の油画」が話題になっていることから、この時点で石井鶴三は口絵や挿絵を出版社に渡していたと思われる。ただし、すべて揃つていたわけではない。

⑧の書簡で、上司小剣は「私の書き足しの原稿がまだ出来ないの、新潮社から劇烈な催促を受けてゐます」と書いている。九月二十三日には追加原稿はできていなかったのである。

『長篇小説全集 第十六巻 上司小剣篇』の口絵や挿絵については、先の「上司小剣『東京』(四部作)の成立過程」¹⁴⁾で言及した。石井鶴三は、昭和三年九月二十六日のものだと思われ¹⁵⁾る上司小剣宛書簡で次のように述べている。

御原稿拝読しました。すぐに御返し致します。それでは「腕角力のところ」と「廢墟」のところを描く事と致します。

私の方はこの二枚で挿絵の方は終りとなります。

上司小剣が新たに書き加えた原稿を、石井鶴三が受け取つたのは九月二十六日頃であることがわかる。つまり、石井鶴三はそれから「新場面」の挿絵を描いたのである。

「新場面」の挿絵二点は、十月五日にはできていたようだ。「追加の絵」に対する上司小剣の礼状が、⑨の書簡である。

⑨石井鶴三宛上司小剣書簡(仮番号〔馬場59-166〕)

お手紙拝見、お骨折りがたう存じ

ました。追加分の絵もあれなら

結構でございました。荷担ぎの少

年が出てゐやしないかと思つて

ちよつと申し上げたのでした。

腕角力の下絵面白く拝見いた

しました。まづは御礼まで取り

敢へず。

今年は忙しくて、院展も遂ひ拝

見出来ませんでした。

十月五日

上司生

石井様

封筒表の宛先は「市外。板橋町字中丸二六六／石井鶴三様」である。消印は年が欠けているが十月五日、時間は午後六時から八時、地名は「目□」、最初の文字は読めるが、後の一字が欠けている。封

筒裏の差出人は「東京、下目黒四二二／上司小剣」（印）で、日付が「十月五日」と青鉛筆で記されている。便箋は「東京文房堂製」四百字詰原稿用紙一枚で、本文は封筒と同様にペンで書かれている。

消印の年は欠けているが、本文に出てくる「腕角力の下絵」は『長篇小説全集 第十六巻 上司小剣篇』の挿絵の下絵なので、⑨の書簡は昭和三年十月五日に書かれたものである。

「荷担ぎの少年が出てゐやしないかと思つてちよつと申し上げたのでした」というので、これ以前の手紙で上司小剣は石井鶴三に「追加分の絵」について問い合わせたようである。しかし、『長篇小説全集 第十六巻 上司小剣篇』で確認する限り、二点の「追加分の絵」にあたる場面には、小説にも挿絵にも「荷担ぎの少年」は登場しない。だから、上司小剣は⑨の書簡で「あれなら結構でございます」と報告したのである。

『長篇小説全集 第十六巻 上司小剣篇』は、昭和三年十一月一日に新潮社より刊行された。口絵は「春田と濱江」と題した油絵である。挿絵は〈愛欲篇〉に五点、〈労働篇〉に四点、〈建設篇〉に五点入れられており、計十四点ある。いずれの絵も『長篇小説全集 第十六巻 上司小剣篇』のために新しく描かれたものである。新潮社は当初「挿絵を三十枚ほど入れたい」と考えていた。しかし、石井鶴三がこれまでのもを使わず、新たに描くというので、挿絵の数が出版社の希望の約半分になったのではないか。ただ、石井鶴三は「追加分の絵」だけでなく、「明治神宮祭の画」や「裸婦（小夜子入浴、争闘篇）の絵」も描いており、上司小剣の希望には応えている。

四

先の上司小剣の自筆年譜⁶によると、「東京」第四部〈建設篇〉は昭和五年に起筆されたい。発表されるのは戦後であるが、それまでの間に、上司小剣は「東京」四部作完結への意欲とその苦勞を石井鶴三に宛てた⑩の書簡に書いている。

⑩ 石井鶴三宛上司小剣書簡（仮番号「馬場59—169」）

石井鶴三様 上司小剣

拝呈。新聞で承りましたが、近く御外遊のおもむき、まことに結構に存じます。久しくお目にかゝりませんが、御健勝の御様子は時々御作品を通して拝見して居ります。

先頃の試作展覧会の御習作と銘あるも

のぞ、殊に結構と存じ、暫らくあの傍を立ち去り得ませんでした。小生の『東京』も生きてゐるうちに最後の一編を書き上げたいと思つて着筆して居りますが、スツカリ時代が變つたため非常に書きにくく、

それだけまた骨折甲斐があるやうに思はれ、せっせとやつてはゐますが、なかく筆が進まず、いつ完成するか予想もつきません。しかし、生きて居れば必らずやるつもりですから、御外遊御帰国の後にはまた釘装その他是非お願ひしたいと存じて居ります。いづれそのうちお目にかゝる機会もあること、思ひますが、とりあへず御

外遊のお喜びまで申し上げます。草々。

奥様に何卒よろしくお願ひ申します。

三月二十二日

封筒表の宛先は「市外。板橋町中丸二六二／石井鶴三様」である。消印は昭和七年三月二十二日、時間は午後零時から四時、地名は「目黒」である。封筒裏の差出人は「東京市外・馬込町／北洗束（軒）六一九／上司小剣」（印）で、上司小剣が日付を「三月二十二日」と記している。便箋は「MARUZEN」の四百字詰原稿用紙一枚で、本文は封筒と同様にペンで書かれている。

上司小剣は新聞で石井鶴三が外遊する予定であることを知り、祝辞を述べたのである。

「先頃の試作展覧会」というのは、昭和七年に開催された第十六回院試作展であろう。石井鶴三は「裸体習作」を出品したが、上司小剣は「御習作と銘あるものなぞ、殊に結構と存じ、暫らくあの傍を立ち去り得ませんでした」と絶賛している。

さらに上司小剣は「小生の『東京』も生きてゐるうちに最後の一篇を書き上げたいと思つて着筆して居りますが、スツカリ時代が変つたため非常に書きにくく、それだけまた骨折甲斐があるやうに思はれ、セツセとやつてはゐますが、なかく筆が進まず、いつ完成するか予想もつきません」と記している。一年前の昭和六年九月に満州事変がおこり、十五年戦争が始まつていた。読売新聞社に二十六年間在職し、一人のジャーナリストとして社会を見てきた上司小剣は、すでにリタイアしていたとはいえ、時代の変化を感じ取っていたのであろう。さらに、先に挙げた「未完成の『東京』の記」では『東京第四部建設篇』は永代橋の潜函工事から書き始めるつもりな

のだが、なかなか捗取らない」と述べていた。上司小剣には第四部〈建設篇〉の構想があり、「東京」の完結への意欲も失われていないものの、執筆は順調でなかった様子が窺える。

五

昭和二十一年七月一日、「東京」第四部〈争闘篇〉の第一回が雑誌「東宝」再刊六号に発表された。

拙稿「上司小剣「東京」第四部〈建設篇〉の連載と『上司小剣選集』の刊行について」⁽¹⁸⁾で紹介した昭和二十一年六月二十四日付の石井鶴三宛上司小剣書簡で、上司小剣は石井鶴三に「東京」第四部〈建設篇〉に着手するので「二年先き」に第四部〈建設篇〉の挿絵と装幀を頼みたいと依頼している。「東宝」に連載された「東京」第四部〈建設篇〉には、挿絵がある。しかし、石井鶴三によるものではない。⁽¹⁹⁾ 上司小剣は昭和二十二年一月九日付の石井鶴三宛書簡で「私の『東京』はあなたの挿画がいたゞけなかつた、書くにも張り合ひがないやうな気がして居ります」と述べている。上司小剣としては、「東京」の挿絵や装幀を任せられる人は、やはり石井鶴三をおいてほかにはいなかったのである。

「東宝」での連載は、昭和二十二年三月一日発行の再刊十号で終わる。同じ号の「編集室より」で、「上司小剣氏に百枚書いて頂いた『東京』も本号を以て一応連載を打切ることになつた。以下二百枚完成の上は、単行本として刊行される予定である」と説明されている。

上司小剣は昭和二十二年の春頃から風邪を引いたり、胃痙攣を起こしたりして体調を崩すことが多くなっていた。自分の健康状態に

不安を感じていた上司小剣は、「東京」四部作の完結を急いだのである。しかし、「東宝」の連載打ち切り後、第四部〈建設篇〉の続稿は書いていないようである。

昭和二十二年九月一日、上司小剣は胃瘻瘻を起こし、さらに脳溢血で人事不省に陥る。そして、九月二日に帰らぬ人となった。上司小剣の死によって、「東京」四部作は未完のままである。

上司小剣は「東京」第四部〈建設篇〉の連載開始にあたり、昭和二十一年七月一日発行の「東宝」再刊六号に、作者のことを寄せている。その中で、「私が一生の大事業のつもりで長篇小説『東京』に着手してから、すでに二十数年の月日が流れた。第一部愛欲篇、第二部労働篇、第三部争闘篇を相次いで出版し、争闘篇が出てからも、十八年になる」と述べている。つまり、上司小剣は「二十数年」かけて「東京」四部作を完結し、「十八年」待つて第四部〈建設篇〉を出版しようとしていたのである。その間に、震災や戦災を経験し、社会も大きく変わっていった。出版状況も変化する。「東京」はその煽りを食う。上司小剣にとつて、「東京」四部作を完成させるのは、まさに「一生の大事業」であった。激動の「二十数年」に変わらなかつたのは、石井鶴三の仕事に対する上司小剣の信頼である。

上司小剣と石井鶴三の共同作業および協働関係を探る上で、両者の往復書簡は第一級の資料である。例えば、『東京 第一部 愛欲篇』の校正を出版社が石井鶴三に見せていなかったことや、表紙や挿絵の題字に石井鶴三の筆蹟が用いられたことなど、本稿で紹介した十通によって、「東京」の出版に関する空白部分がいくつか埋まった。また、「東京」の出版においても、上司小剣が石井鶴三と出版社を仲介し、三者の協働関係を築くために尽力していたことがわかつた。

日本の出版文化史を明らかにするには、一つひとつの事例を検証

していくしかない。ピースを一つずつ置いていくことで、やがて全体像が見えてくるであろう。その貴重な事例の一つが上司小剣の「東京」の出版であると考えている。

注

- (1) 拙稿「上司小剣『東京』四部作の成立過程」(日本近代文学館紀要資料 探索) 第7号、平成24年3月20日、61〜76頁
- (2) 拙稿「上司小剣『東京 第一部 愛欲篇』の制作状況」(信州大学附属図書館研究) 第3号、平成26年1月31日、37〜48頁
- (3) 拙稿「上司小剣『東京 第二部 労働篇』の出版とその後」(信州大学附属図書館研究) 第4号、平成27年1月31日、29〜40頁
- (4) 拙稿「上司小剣『東京』四部作の成立過程」(前掲) 69〜71頁。
- (5) 「東京」第一部〈愛欲篇〉については、拙稿「上司小剣『東京』〈愛欲篇〉の新聞連載の事情」(信州大学附属図書館研究) 第2号、平成25年1月31日、1〜11頁)を参照。
- (6) 上司小剣の『花道』は、大正十年二月三十日マに玄文社より刊行された。「花道」については、拙稿「上司小剣「森の家」「花道」の挿絵と装幀に関して」(信州大学附属図書館研究) 第1号、平成24年3月31日、41〜52頁)を参照。
- (7) 上司小剣「未完成『東京』の記」(「長篇小説」第1巻3号、昭和12年5月1日) 15頁。
- (8) 上司小剣「未完成『東京』の記」(前掲) 15頁。
- (9) 「東京」第二部〈労働篇〉は、大正10年7月15日から11年1月1日まで「中央公論」(第36年8号〜37年1号)に、大正11年1月1日から8月1日まで「解放」(第4巻1号〜8号)に発表された。〈労働篇〉の最後の章にあたる「自身の姿」は『東京 第二部 労働篇』(大正11年8月25日、大鑑閣)を刊行す

る際に加筆された。

- (10) 上司小剣「未完成『東京』の記」(前掲) 16頁。
- (11) 「東京」第三部〈争闘篇〉は、雑誌「解放」の大正十二年一月一日発行の第五巻一号と、同年五月一日発行の第五巻五号に発表された。
- (12) 「上司小剣年譜」(『現代日本文学全集第23巻』昭和5年4月13日、改造社)
- (13) 「東京日日新聞」に発表された中里介山の「大菩薩峠」のうち、〈無明の巻〉は大正十四年一月六日から五月十二日まで、〈流転の巻〉は大正十五年一月五日から五月二十日まで連載されている。
- (14) 拙稿「上司小剣『東京』四部作の成立過程」(前掲) 70〜72頁。
- (15) 拙稿「上司小剣『東京』四部作の成立過程」(前掲) で紹介した上司小剣宛石井鶴三書簡は、本文末尾に「廿六日夕」とあるが、使い便で消印がないため、封筒からは何年何月のものかはわからない。本文が『長篇小説全集第十六巻 上司小剣篇』の挿絵の場面を知らせる内容だったので、昭和三年の書簡であることは推定できたが、月は不明であった。「廿六日夕」の石井鶴三書簡から、上司小剣の追加原稿を石井鶴三が読んだことがわかる。今回本稿で紹介した⑧と⑨の書簡が見つかったことで、九月二十三日には上司小剣の追加原稿はできていなかったこと、十月五日には追加原稿に対応する石井鶴三の挿絵が完成していたことがわかり、「廿六日夕」の石井鶴三書簡は昭和三年九月二十六日に書かれたものであることが明らかになったのである。
- (16) 「上司小剣年譜」(『現代日本文学全集第23巻』前掲)
- (17) 上司小剣「未完成『東京』の記」(前掲) 16頁。
- (18) 拙稿「上司小剣『東京』第四部〈建設篇〉の連載と『上司小剣選集』の刊行について」(『信州大学附属図書館研究』第5号、平成二十八年一月三十一日) 30頁。
- (19) 挿絵は第一回を福山義夫が、第二回以降を宮田重雄が担当している。
- (20) 昭和二十二年一月九日付の石井鶴三宛上司小剣書簡には、「いつぞや電通から出しました挿絵展覧会のあの立派な豪華な図録を出して、あなたの見事

な「東京」の洋画の挿絵に見とれてみます」とある。拙稿「上司小剣「東京」第四部〈建設篇〉の連載と『上司小剣選集』の刊行について」では、この「挿絵展覧会」を「春陽会展覧会」ではないかと推測したが、その後の調査で日本電報通信社の創立四十周年記念事業の一つとして、昭和十五年十一月二十日から二十九日まで三越本店で、同年十二月十八日から二十二日まで大阪三越で開催された「明治、大正、昭和挿絵文化展覧会」であり、「立派な豪華な図録」も『明治大正昭和挿絵文化展覧会図録』(昭和十六年七月五日、日本電報通信社)だとわかったので、ここで訂正させていただく。

参考文献

- 『石井鶴三全集2』(昭和61年7月18日、形象社)
- 『石井鶴三全集3』(昭和61年3月17日、形象社)
- 『石井鶴三全集別巻I』(平成元年3月29日、形象社)
- 『石井鶴三日記第一巻』(平成十七年三月十七日、形文社)

*本稿を執筆するにあたり、高野奈保氏・多田藏人氏・出口智之氏・泉由美氏・松本和也氏にご教示を賜った。ここに記して謝意を表したい。

*本稿は科学研究費補助金(基盤研究C・課題番号16K02420)による研究成果の一部である。